

ジョン・デバラジ

ピース X アート
第 5 回招聘事業
報告書

2013 年 9 月

主催：ボーンフリーアート大阪

招聘趣旨

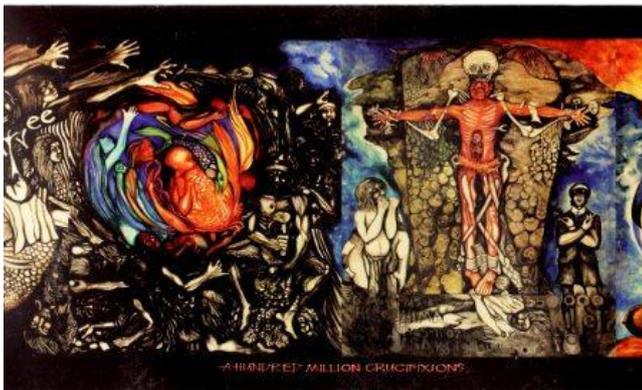
ボーンフリーアート大阪代表 阪口史保

1945年8月、2つの原子爆弾が広島と長崎に落ち30万人以上の犠牲者を出した。「三度許すまじ原爆を」と人々は誓ったが、現在一度引き金を引けば一瞬にして地球全体が破壊されてしまうほど核の脅威にさらされている。このような状況において、私達は国境を越えて世界の人々の心をつなぐ「平和の礎」を構築することが必要であり、そのためには子どもの頃から相互理解と友情を育む国際交流が不可欠である。

インドのアーティスト兼平和活動家であり、ボーンフリーアートスクール（以下、ボーンフリー）の創設者であるジョン・デバラジ氏は、2011年8月にピースおおさか(大阪平和国際センター)を訪問し、日本が受けた戦争被害と他国の加害を含めた日本の加害について詳細な展示を目にし、大きな衝撃を受けた。それをきっかけとして、デバラジ氏は、「戦争とは何か？」を力強く問いかける絵画「一億人の十字架刑～戦争に反対するアート（原題：A hundred million crucifixion-Art Against War）」を制作、本作品をピースおおさかに寄贈することで「世界で唯一の被爆国である日本から平和を発信して欲しい」と提案した。

そこでボーンフリーアート大阪（任意団体）では、インドから絵画「一億人の十字架刑」の寄贈を支援するとともに、「ピースXアート・ワークショップ」を企画し、日本国内のアーティストとの協働によりワークショップを開催することにした。「平和」をテーマとしたアートのワークショップを開催し、子どもや若者を含めた市民が国際平和の実現に主体的に関わっていくこと、さらには日本の大阪から平和を発信することを目的として、招聘プロジェクトの実施に至った。

ピースXアート



ボーンフリーアートスクール共同代表 中山実生

今回の来日において、過去の招聘事業と全く異なっていたことは、第一にデバラジが一人の“アーティスト”として来日し、平和・戦争をテーマとした絵画を平和資料館に寄贈することであった。アーティストとして、平和ミュージアムに作品を展示し、寄贈することはとても名誉であること以上にその重要性を本人は認識していた。「一億人の十字架刑」は、6か月かけて制作した縦3メートル横7メートルと巨大な4つのキャンバスからなる水彩画である。一

番目のパネルでは、「生命」を基点とし、「子どもは自由を持って生まれてくる」という明るい将来を表現するような色調が展開している。二つ目のパネルでは、その自由に生まれてきた子どもがやがておとなの食欲の犠牲となり労働を強いられる、という子どもが直面する苦難が表現されている。色調は水墨画のように黒い。第三のパネルにおいては、子どもたちが直面する苦悩の根源は、戦争を欲している利益追求中心のおとな、もしくは国であるということが明確に描かれている。ここでの戦争の象徴は「ヒロシマ・ナガサキ」である。その際限のない欲はやがて核開発へとつながっている。それを表現したのが第四のパネルである。核保有国の国旗で色づけられた核の塊だ。その横にはオキナワが顔を出し、ジュゴンも描かれている¹。

デバラジの絵は常に政治的、社会的、文化的メッセージを込めたものであり見る者に様々なことを語りかけている。デバラジの中にはピカソの反戦巨大絵画「ゲルニカ」をはっきりと意識したものがあり、アーティストとして平和を考え、表現したものだ。巨大絵画の意味を解くには鋭い観察が必要で、絵の隅々に反戦・平和の思いが込められている。この絵画は永久に日本に残ることとなったが、現在はピースおおさかの倉庫に収められて

いるため、今後公開展示場を探している。インドのアーティストとして誰よりも強く憲法9条を思い、ヒロシマ・ナガサキを忘れず核廃絶を訴えるデバラジは今後もインドでアートを通して発信し続けるであろう。

第二の招聘目的には、デバラジ自身が戦争の歴史と今もなお続く平和への闘争を学び、その情報と現地での経験をインドへ持って帰ることであった。そのような目的があったため、講演等での内容は核廃絶や憲法9条がインドにとって、世界にとっていかに重要であるかということやアーティストとしての平和を創る役割などが語られた。2008年、2011年と広島・長崎・大阪にある平和資料館とグランドゼロを訪問した経験より、将来はインドで平和ミュージアムを設立したいという構想を持ち出した。インドの教育現場ではいわゆる「平和教育」というものがほぼ皆無であるため今後こうした取り組みにできるだけ助けとなるような働きをしたいと考える。

第三に、「オキナワ」の大地に踏み入れたことはより大きな衝撃とアーティストとして新しい作品に取り掛かりたいという抑えがたい衝動に駆られたことであろう。そこでは初めて見る米軍基地を前に課題の大きさを感じたのは間違いない。「オキナワ」では戦闘機 F16 を夢中で撮影するウチナンチューから、辺野古で命をかけて座り続け海を守ろうとしているウチナンチューまで出会った。ウチナンチューが語るその一言一言をカメラに収めようと努めた。沖縄の佐喜眞美術館で見た丸木夫妻の巨大反戦絵画や金城実の反戦彫刻もアーティストとしての彼には非常に大きなインスピレーションを受けるものであったろう。

そして、最後に、本人にとってより大きく届き身近に感じた「ゲンパツ問題」が、デバラジがアーティストとして果たす役割の必要性をより強く感じたことであっただろう。「フクシマ」の地へ足を入れ、放射能から身を守る白い防御服に身を包まれた。福島の実態が全く伝わっていないインドからやってきたが、現場の事情を少しでもかじるきっかけとなった。インドのマン・モハン首相は、今年、日本の原発輸出と提携を結ぶ国家プロジェクトを立ち上げたが、国内では広島・長崎の史実さえもあまり知れ渡っていない。ましてや福島原発事故後の現在に至るまでの経過も人には知られていない。現在、南インドのタミール・ナドゥ州のクダグラムという町には原発が聳え立ち現地では既に健康被害も報告されている。そういった状況の中で今後この問題にも市民レベルで取り組んでいけることができるよう活動していきたい。



大阪報告；平和を願うアートプロジェクト〜武器よりも絵筆が 世界を変える！〜

阪口史保



大阪では、絵画寄贈にあたり何度もピースおおさかと議論を重ねてきた。ピースおおさかでは本年4月より加害の展示を完全撤去、展示の仕方を大幅に修正する、という方針を橋本市長が打ち出して以来大揺れで当初私たちの力で何ができるのか、という不安もあった。しかし、その不安を払拭したのは、平和への強い思いを持つアーティストとの出会いがあったからであろう。大阪で第九にあわせて憲法9条の歌を歌うアーティスト、沖縄のエイサーをおどり子どもたちに沖縄のことを伝えようとしている教師の方、福島から避難して

以来アートで思いを訴える画家の方など様々なアーティストが出会う機会を作ることができたであろう。それが私の中で「平和の礎」となっていた。

絵画の展示にあたってデバラジ氏は1週間早く来日し、絵画のフレームづくりにずいぶん時間を費やした。寄贈するにあたって10歳の子どもと70歳の男性が火を灯すインドの開会式のやり方で寄贈された。さらに、アー

ティストによるダンスパフォーマンス、9条をテーマに歌うアーティストなど様々な人がプログラムを盛り上げた。

オキナワを愛する人との出会い～いちやりばちよーでー

中山実生

沖縄での訪問は個人的には3回目で、高校生、大学生、そして今30代になっての再びの沖縄であった。その3回とも平和学習で訪れたわけだが、時と共に沖縄が変遷していったのか正直には私には分らない。ただし、今回は色々な人との出会いの中で、基地が必要だと思っているウチナンチューにも出会ったこと、そして反戦を訴えるアーティストの大作を見ることができたことが自分にとってとても大きかった。もちろん短期滞在では沖縄の全容は全く掴めるはずもないが、それでも再び自分の中に眠っていた“沖縄に惹きつけられる思い”が再燃したことは言うまでもない。沖縄のことばで「いちやりばちよーでー」というのがあり、「会えばみな兄弟」という素晴らしい言葉だ。これを感じつつ、今回学んだことを少し以下まとめてみた。

日本唯一の地上戦～沖縄

2013年6月23日で沖縄戦を終えて68年が経った。日本でも最初で最後となった地上戦では20万人という数の犠牲者を出している。沖縄戦争体験者の4割がいまも遅発性PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しんでいるとの報告がされているⁱⁱ。

沖縄の地上戦は1945年3月末に米軍が慶良間諸島を占領したことに始まる。当時の日本軍にとっての沖縄は米軍との本土決戦を一日も遅くするための時間稼ぎのための戦いであり、日本軍が同国民を守らなかったことにより民間人の死者数を多数出した戦であった。当時の軍事用語で言う「玉砕」があったガマでの『集団自決』では、家族が家族を殺しあうという人間の生き地獄が展開された。

旅の途中で訪れた有名なチビチリガマも必見である。知花昌一氏^{iv}の案内により読谷村のチビチリガマへ入った。そこは140名中83名の人が犠牲となった場所である。沖縄は自然にできた洞窟があり、現地ではガマと呼ばれているが、戦時には避難生活場所として軍人と民間人がいた。洞窟の奥には今もなお散らばっている骨片、ビン、歯型、メガネ、コンパクトなどの遺品が息を潜める。

1945年3月の沖縄上陸から6月まで「鉄の暴風」と呼ばれた米軍による大量の爆弾攻めにて第32部隊牛島満率いる日本軍本営があった首里城は陥落した。その時すでに日本軍は南下しており、そこで民間人は軍との運命を共にさせられた。10代の子どもたちを動員した「ひめゆり学徒隊」は軍に奉仕、共に行動しそこに沖縄戦の悲劇もまた一つ生みだされた。既に日本軍の敗北は明らかであったが、当時の牛島は一人残らず最後まで戦うという軍令を出したがために民間人も巻き添えとなった。

ひめゆり学徒隊の生き残りでありひめゆり平和祈念資料館館長島袋淑子氏（85歳、当時17歳、写真前列）は『皇民化教育』が真髓まで染み込んでいた当時の私たちは愚かだった」とインタビューで述べられている。「竹やりをもって敵をつつく練習をさせられて、これで本当に銃を持った米軍に勝てるのだろうか」と疑問に思った。本当にばかだったねえ。」と続く。ひめゆり学徒隊へは沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校から生徒222名と教師18名が送り込まれ、そのうちの138名が戦死した。毎日ひめゆり資料館で証言を勢力的にさせられていっしやる島袋氏であり、生存者は戦後直後の104名から今10名を切ろうとしている。ここで生存者の方からお話が聞けるのもそう長くは続かない



ため今こそこを訪れることをお勧めしたい。資料館に入ると戦死した子どもたちの遺影があり、その子の性格やどうやって死を遂げたのか、中にはどうやって灰となってしまったか分からない子もおり、この部屋は来場者が一人ひとりの死と対話する場である。ここには実際に陸軍病院として使われた豪を上から見ることができ、デイゴの木も隣にひっそりと立っている。

ひめゆり平和祈念資料館と対照的な平和資料館であると印象を受けた沖縄平和祈念資料館にここで少し言及したい。この資料館ではガマでの様子が蝸人形で表現されておりリアルに作られているかのようであるが、ここは全く史実と違うことが指摘されてきた。ガマの中で怯える民間人と威嚇的な表情をした軍人の人形が当時を物語ろうとしているようだが、問題は、軍人の銃がガマの入り口を指しており、それはあたかも軍人が民間人を敵から守ろうとしているかのようだ。しかし、声を上げて泣く赤ん坊は声が漏れて敵に見つかってはいけないからと突いて殺したという証言が残されている。これに対して批判も抗議も行われたのだが、いまだに何の改めも行われていない。

平和資料館で外国人親子が熱心に展示に目を向けていたので尋ねると、息子は嘉手納基地の軍機の整備士であり沖縄駐在が4年となったが初めてここを訪れたそうだ。アメリカ人としてこの史実をどう感じるかという質問に対して「複雑な気持ちだ」と一言述べたが言葉に詰まっていたような印象を受けた。彼によると米兵でもここを訪れる人も少なからずいるということだ。

基地

日本にある米軍基地の8割が沖縄に集中することが問題で「沖縄の負担を軽減する」と日本政府が発言をしているが、最も深刻な問題は、世界で最も危険な基地と米軍さえ認めるものが沖縄に存在することであろう。沖縄に日本軍が軍事飛行場をつくったその場所が戦後米軍基地と姿を変え、アジア・太平洋圏で最も重要な軍用基地となった。当時米軍にとって沖縄が重要だったのはソ連との対立を見越したものであったことは言うまでもないが、現在は中国、北朝鮮への防波堤であることだ。最も危険な基地という意味は、①住宅過密地の中に基地があり訓練飛行が住宅地の隣で行われていること、②ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争、アフガン戦争と続く代々のアメリカの戦争部隊は沖縄から出撃していることである。また、③北部では実弾演習が自然豊かなヤンバルと呼ばれる森林地帯で行われている。基地が余りにも身近にあるためか、共存という「錯覚」を生む。

沖縄に降り立った日に年に一度開かれる普天間基地オープンデーがあり基地が公開される、ということで早速足を運んだ。基地の中は別世界でだだっ広く遠くに何機もの軍用機が見えた。目の前に灰色の化け物が見えたときそこで身元確認をしている日本人がいた。いわゆる彼らは基地で働く日本人だ。しかし、インド人であるデバラジは見学を拒否された。米軍によると“基地に入れない国リスト”があるという。中国、アフガニスタン、パキスタン、インド、北朝鮮、アフリカの諸国、イスラム圏等、いわゆる第三世界の国で40数カ国ある。入場を拒否されたにも関わらず、デバラジのパスポートの詳細を提出する義務があることを伝えられた時、なぜだか理解できず議論となった。基地の中身を全く見せないにも関わらず、米軍はこうして個人情報を集めている。聞くと2年間保有し、その人が何も軍に対して危害を与えなかったとしたら情報を破棄するというが、納得は当然できなかった。

オスプレイの展示もあり、撮影目的を果たすことが必要だったのでカメラを持って軍機の中に入っていった。そこにいた軍人にインタビューをした。その軍用機は人を100人以上輸送することができ、アフガン戦争にも行ったという。「アフガニスタンではたくさんの民間人が犠牲になっていることを知っていると思うがどう思うか」という踏み込んだ質問をすると「I did my job (自分はやらなければいけないことをやったまでだ。)」というなんの躊躇もない回答が返ってきた。会場にはオスプレイ機に幼児を乗せて記念写真を撮っている親子もたくさんいた。

第二次世界大戦以来世界でアメリカが関与した戦争は、ベトナム戦争にはじまり湾岸戦争、イラク戦争、アフガン戦争であり近年は私たちも映画やテレビゲームで体験するような戦争が繰り返されたが、アメリカ軍機はすべて沖縄から飛び立った。何十万、何百万という人を殺した軍機が戦地から帰ってきたのも沖縄だ。その軍機が駐機するのが嘉手納基地で、いわゆる安保の丘（道の駅かでな）からも覗ける。まるで航空ショーを見ているかのように数分おきに戦闘機F16がタッチアンドゴー（着陸した直後に離陸）をする。400ミリの望遠レンズを持つプロのカメラマンにも出会った。彼らは軍機の写真を撮るのが仕事だが、いつどの軍機が来るのかというのは嘉手納基地の管制塔から流れる司令を電波で常に追っている。この丘で20年以上も写真を撮り続けている沖縄生まれのカメラマンは「日本の自衛隊の軍力は有事にはまったく立ちうちできないからアメリカに守られなければならない」と断言したのが印象的であった。

「普天間基地の全面返還」とは土地が沖縄の人に帰り、米軍が撤退することではなく、沖縄県名護市の「辺野古への移設建設」を意味する。絶滅の危機にあるジュゴンという魚が生息する辺野古の青い海に軍機を「ヘリ基地いらない二見十区以北の会」代表浦島悦子氏は1995年から今年で18年目となる涙ぐましい闘いを続けてきた活動家だ。日本政府が基地建設のための海底土台工事を始めた時、カヌーを漕いで現場まで行き建設を阻止した話や、真冬の中海に立つ政府が建てた足場の中に入り座り込み行動を続けられた。まさに身を投げ打つての阻止



行動の話の伺いこの小さな体を持つ穏やかなお人柄の浦島氏から湧き出る命かけての闘いを全身から感じ取った^{vi}。ジュゴンの研究をされていることから基地について学び活動を共にされている活動家やヘリ基地反対協議会事務局^{vii}の方とも話ができた。県外から移住されたその方は、「基地があり、戦争に向かう戦闘機が飛び交う沖縄の現状に黙っていることが戦争に加担する側に自分も立っていることに気づいた」というコメントが心に残った。ジュゴンが生息しているだろうと言われる通称「ジュゴンが見える丘」（写真←。丘に立つ浦島氏）では晴れ渡る青や緑、エメラルドグリーン^{viii}の海が見えた。現在はジュゴンが食べた海藻の

跡を定期的に観察して生息を見守っているという。

沖縄の自然の偉大さは語るまでもないが意外な事実には沖縄の自然公園を国が国立指定自然公園として定めていないことだ。その理由は、日米安保条約があるためであり、言い換えれば基地存在には沖縄の自然は犠牲にするということが暗黙の了解だ。ヤンバルには北部訓練場というところがあり、そこはジャングル訓練と実弾演習が毎日のように繰り返されている。ここでは若い人から沖縄戦を経験したおば一まで座り込みを続けている「ヘリパッドいらない住民の会」^{viii}の平和運動家に出会った（写真↓）。基地のフェンスに座り込みテントを立て、ここは生きることを賭けた闘いであり、生きることを犠牲にした闘いでもあると感じた。犠牲というのは自分の普段の生活や仕事を後回しに抗議の座り込みを続けていること、国から訴えられ裁判となった活動家もいるということを知ったからだ。高江という小さな村の1%ぐらいの人しか座り込みをしていないということも聞いた。ここに新たにヘリパッドをつくらうとしている米軍を監視するために活動している。一番若いスタッフは17歳の男性でヤンバルに住む貴重な鳥の絵を書きながら活動をしている。ヤンバルに行く途中に見た公共施設は「思いやり予算」で豪華につくられた建物が並ぶ。



もう一つの基地の町である金武町（きんちょう）には村の

60%^{ix}を占める4つの米軍施設があり、16～19歳までの若い海兵隊兵士が約6000人いる。キャンプ・ハンセン、ギンバル訓練場、金武ブルー・ビーチ訓練場、金武レッド・ビーチ訓練場である。アメリカには貧困や失業対策として入隊させることで大学費用を免除したり、給料を多く支払ったりしながらこうした若い人を軍人としてきた。

私たちが滞在した友人宅のすぐ隣は普天間基地で、夜中の1時頃まで、朝は6時ぐらいから軍機のアイドリングの音が聞こえていた。嘉手納基地の横に住む青年へインタビューした際、彼は「騒音で迷惑をしているが慣れてしまう私たちもいる。しかし基地はなくなって欲しい」と語った。1970年代に基地経済で潤っていたと言われるコザの町は今ではすっかりさびており、特に去年日本政府による飲酒販売の禁止を決めてからは米軍兵士が夜を闊歩することもほぼなくなったという。この町を見て育ってきた20代後半の男性は「基地はあっても良い。メディアの過剰な報道が町を寂れさせる」と語った。



それぞれの場所で聞いてきた基地に対する地元の人の意見はまちまちで非常に複雑であった。全国で失業率が一番高い沖縄には基地がなければどうやって食べていく、と問う人と、基地とは絶対に共存できないと言う人。戦争では絶対軍は民間を守らないと語る戦争経験者とアメリカに守られる必要がある、という沖縄の人。沖縄には沖縄戦を生き残った人たち、基地反対のために人生をかけて抵抗してきた人たち、基地で職を得て暮らしている人たち、基地についてあまり考えたことがない若者。こうした人たちが混在している場であった。この複雑であまりに違う見解に沖縄自身が引き裂かれ、地元がばらばらになっていることを痛感した。生きて戦争について証言している、声を振り絞って、自分を責めながらも生きてきたおばーとおじーが言っていることに、耳を傾けようとしないう国。沖縄に基地が必要だと思っているのはアメリカ政府以上に日本政府である、と地元の人は分析する。

戦争とアート

沖縄ではこころに響く素晴らしい芸術に出会うこともできた。まずは丸木位里・俊夫妻が描いた巨大絵画「沖縄戦の図」が所蔵された佐喜真間美術館（宜野湾市）である。嘉手納基地が隣接している状態に現在はあるが、当時基地返還運動を行い奪還した場所である。取り戻した場所を1ミリも無駄にせず建てられた美術館には戦争に関する絵が訪れる者の心に訴える。丸木夫妻はすでに「原爆の図」を描かれており、沖縄の絵は沖縄にあるべきだと思っていたという。本美術館の2階のテラスからは基地が見えるようになっている。



沖縄の反戦アーティストの一人、反戦彫刻家金城実氏がいる。読谷村にある彼の自宅の庭には所狭しと彼の彫刻が置かれている。沖縄戦から基地建設、現代の基地闘争に至るまでの彫刻作品がずらりと並ぶ。印象深いのは米軍が戦車で土地を開拓しようとしたところに座って、非暴力をもって土地を返せと訴えた伊江島の反戦地主阿波根昌鴻氏^xが右手に聖書を持ち「軍人さんアメリカにおかえりなさい」と言っている姿だ（写真↑）。伊江島には日本軍がかつて軍の滑走路を建設した後、戦後アメリカは農民の土地を取り上げ米軍基地を建設した。それに非暴力で抵抗した日本のマハトマ・ガンジーである同氏が死ぬまで闘い続けた歴史は語り継がなければならない。米軍と話をするときには座って話をする、という姿勢を貫いた非暴力平和運動家だ。その彼の堂々たる闘いを表した彫刻が印象的である。

こうして沖縄の短い滞在の中で活動家や芸術家と交わることができて大変幸せだと感じた。そして沖縄であれ、本島であれ、海外であれ、どこにいても沖縄の現実を改めて高く関心を持つとうという気持ちを強く感じた。沖縄の歌も花も木々も海も人もすべて魅力的だ。だからこそ、人を不幸に追いやる基地とは共存してはいけない。沖縄だけでなく、日本全国にも、世界にもこの暴力の礎を築いてはいけない。平和を創り出す者は幸いであるといわれるが、高江の人や辺野古の人たちはまさに勇気ある素晴らしい人たちだ。嘉数高台で4、5歳の幼稚園児たちが「あ！オスプレイだ！」と叫んでいたが、この小さな子どもたちのために私たちは、高江や辺野古の人たちを見習って、手を取り合い本当の「平和の礎」を築く必要があると感じる。

主催団体；ボーンフリーアート大阪

2011年のボーンフリーアートスクール招聘時に集まったメンバーにより構成。子どもや若者を含めた市民がアートを通じた表現により、国際平和の実現に主体的に関わっていくこと、さらには日本から平和を発信することを目指して活動しています。なお、2013年8月にはNPO法人化を目指した「ボーンフリーアートJapan」が設立され、「ボーンフリーアート大阪」はこの団体に吸収される形となりました。今後大阪と東京を中心に活動していきます。

謝辞

阪口史保

本プロジェクトの実現にあたっては、いくつもの峠があり「実現できないのでは・・・」と思うことが度々ありましたが、中山尚幸さんの「これは平和のために実現しなければ」という言葉に何度も励まされました。本プロジェクトのきっかけを作っていただいたヒューライツ大阪の藤本さん、アドバイスをしていただいた大阪府外国人教育研究協議会の安野さん、様々な団体との間を取り持ってくれた牧野さん、手の回らないところを助けてくれた日野るり子ギリさんには心から感謝しています。また、今回協力していただいた、たくさんのアーティストの方々にはお会いできて本当に嬉しい、そして平和を共に実現できることを心から願っています。

ジョン・デバラジ

日本での平和キャンペーンから帰ってきました。今回の経験はとても豊かなものとなりました。自分が寄贈する絵のフレームを作るため来日の最初の週はそれに明け暮れました。寄贈式のオープニングはとても印象深く、なぜならば、5歳のアイシャと70歳の中山さんにより、平和のため火が灯りました。また、ダンスや音楽なども奇跡的な瞬間を生み出してくれました。私の新しい映像作品である「平和の予言者」もより受け入れられました。自分の絵が飾られ、平和について語る事ができたことをとても嬉しく思います。平和のためのアーティストグループを生み出すことが自分のミッションの一つでした。

オキナワに行きましたが、そこは非常に美しく、素晴らしい青い海が広がっているのを見ました。しかし悲劇はこの神聖な土地をアメリカ軍が占領していることです。絶滅しようとしているジュゴンがいる島なのです。軍事的攻撃のために沖縄の土地の60%が使用されていること知り胸が痛みながら見ていました。ベトナム戦争も、イラク戦争も、アフガン戦争もここから始まっていったのです。オスプレイ機が破壊する能力を備えものすごい勢いで飛び立ちアジアの空へと飛んでいくのを見ました。戦闘機が低く早く飛んで行き、学校や家を飛び越えていくのを見ました。その騒音は耐え難いものでした。

私は会う人会う人にインタビューを行いました。沖縄に残された傷が深く人々の中に残っていることを感じました。中にはその傷を奥底に秘め静かに苦しみ耐えている人もいることを感じました。

たくさんの平和資料館を訪れたことは戦争の怖さやその結果について自分にたくさんのことを教えてくれま

した。戦争史の記述が正確であったとも感じました。

それだけではなく、反戦彫刻家や画家とも会うことができました。丸木夫妻の作品がとても心に残りまし、そこからは人々の苦しみを細かに伝えてあり戦争の恐ろしさが伝わってきたものです。佐喜眞美術館では思いもがけず彫刻の母、ケーテ・コルヴィッツの作品に触れあうことができました。ケーテの作品に触ったときに自分の中にこみ上げた感情は筆舌し難いものです。

沖縄の後、東京へ行きました。東京ではチームピースチャレンジャーさんの温かいもてなしがありました。東京では講演が連続で行われ、音楽や対話で平和のため活動する人々や平和について考えている人たちと交流がありました。早稲田大学や津田大学で講演した際は、平和讃歌を日本とインドの言葉で学生たちとともに熱唱しました。東京滞在中にもう一つ行ったことは、横須賀基地を訪れたことです。ベトナム戦争で使われた軍機がありました。ホームステイした自宅の隣は厚木基地でもありそこを飛行する軍機を毎日眺めたものです。

一日だけ、駆け込みで福島へも足を延ばしてみました。そこで私が目撃したのは、津波と福島第一原発により破壊された土地と人でした。放射線レベルは非常に高く、現地に防護服を身にまとい不安ながらも足を踏み入れました。私は本来何でも肯定的に考える人間ですが、こうした日本、仏陀の国の光景は非常に怖ろしいと感じました。大阪から始まり、沖縄、東京、福島で見たことを動画に記録したのでここからフィルムを作成したいと考えています。東京最後の日には、ボーンフリーアートを訪れ子どもたちと1週間過ごされてから長年に渡り良きボーンフリーの理解者・応援者であった森下和子さんのお墓参りをしたことでした。森下さんの写真を見ながら似顔絵を描きました。

講演の中でボーンフリーアートの学校が土地を購入、学校建設を計画していることもアピールしました。8月にはボーンフリーを応援し日本で活動する団体「ボーンフリーアート Japan」が立ち上がりました。2013年末にはバンガロールにて「喜びの海」というピースフェスティバルを企画しておりぜひ皆さんに来て頂きたいと思っています。

最後に日本でお会いし私を受け入れて下さった皆様に感謝の意を述べたいと思います。ありがとうございました。招聘を企画してくれた阪口史保さん、中山尚幸さん、中山実生さん、蔵田えりさん、中山寛子さん、藤田沙知代さんに感謝したいと思います。

協力団体および個人（敬称略）

東京

チームピースチャレンジャー、NPO 法人地球と共に歩む会、リラン・バックレー（明治学院大学講師）、津田塾大学、早稲田大学、慶応大学・サークル SAL（Send and Learn）

大阪

阪口史保（ボーンフリーアート大阪代表）、中山尚幸、池辺幸恵（平和ピアニスト）、藤本伸樹（ヒューライツ大阪職員）、秋元裕美子（第九で9条・漫画家）、牧野進一郎、日野るり子ギリ、安野勝美（大阪府外国人教育研究協議会）、前田光男、増山麗奈（画家・ジャーナリスト）、ピースおおさか、JEARN、ボーンフリーダンス（大木千加、花上あゆみ、鈴木彩華、中山実生）

沖縄

金城まりえ、金井創先生（沖縄キリスト教学院平和研究所コーディネーター）、浦島悦子（二見以北10区の会）、鈴木雅子（北限のジュゴンを見守る会）、仲本勝雄（知念岬写真家）、ヘリパッドいらない住民の会（代表斉藤織恵）、宜野座淳（金武町）、長谷寺、てんてん、ノブキソウイチロウ

日程表

日程	午前	午後	夕方～夜
5月25日	ジョン出国		
26	関西空港到着	到着間もなく、絵を貼り付けるフレーム作成のためホームセンターへ向かう。	朝日新聞社による取材
27	神戸の元町映画館にて、平和に関する映像作品を作り続けていらっしゃる映画監督、マブイ・シネコープの木村修さんと、ジョンの映像作品の交換上映会を行った。	その後に行った懇親会では、日野りこギリさん、木村敏雅さんに阪口も加わり映像だけでなく平和や宗教など話はつきず懇親会も大変充実したものとなった。	
28	アートワークショップ; 高校生達は児童労働の子ども達の映像を学び、ワークとして平和を		精華高校@大阪
29	表す一つの絵を皆で完成させるという体験をし、大変楽しかったとの感想が寄せられた。		
30	ソーシャルメディア「てれれ」の上映会に参加。この上映会は、初心者からプロまで様々な制作者が投稿した映像を無審査でピックアップして、それをカフェで上映するというもの。	ジョンの最新作をいくつか上映し、インドと平和の取り組みについて説明することができた。	今後も、ボーンフリーアートスクール映像作品の「てれれ」での上映、日本の映像作品のインドでの上映、といった双方向の映像交換ができそうである。
31	関西電力本社前で毎週行われている原発に反対する市民グループの集会でジョンが平和について訴え、平和に関する歌を披露した。	憲法9条は世界の平和の理念に通じるものであること、また、原発や平和の活動はもともと若者を惹きつけ様々な人々が手を取り合っていく活動にしなければならないと訴えた。	大阪
6月1日	HEIWA アーティスト・ネットワーク交流会	立命館大学 国際平和ミュージアムでの講演	
2	寄贈式、「ピース×アート」平和を願うワークショップ@ピースおおさか	立命館大学学生との交流@立命館ピースミュージアム	
3		COCOROOM(釜ヶ崎): 釜ヶ崎見学	
4	飯田清和さん(被爆者の方から証言を聞く)	大阪市内	
5	奈良観光		
6			
7		ボーンフリーアート・ライブ『ストリートチルドレンの現状を歌う』～インドの発展の裏側で生きる子ども達～	
8	講演会@神戸 JEARN		上映会&お別れ会
9	沖縄へ移動	嘉数高台/普天間基地訪問	コザでのインタビュー
10	辺野古周辺; 活動家へのインタビュー	高江訪問(ヤンバル地区)	宜野湾市でのインタビュー
11	沖縄キリスト教平和研究所訪問	読谷村訪問・チビチリガマ見学・金城実彫刻	安保の丘見学・講演会@てんてん
12	知念岬訪問・インタビュー	ひめゆりの塔平和資料館・沖縄平和資料館	沖縄アーティストとの交流
13	佐喜真美術館訪問	長谷寺へ移動	長谷寺でのアーティストの交流

14	離島訪問		
15	東京へ移動(11時フライト)	東京	
16		講演(チームピースチャレンジャー)	
17			講演@早稲田大学
18			講演@慶応義塾大学
19	横須賀基地見学		
20		講演@津田塾大学	福島へ移動
21	地元団体インタビュー	原発跡地訪問	東京へ移動
22		講演@チームピースチャレンジャー	
23		お墓参り等	
24	帰国		



ジョン・デバラジ John Devaraj ボーンフリーアートスクールのアーティスティック・ディレクター。彫刻家、画家、演劇家、音楽家、映画監督、写真家、ライター、建築家など多岐分野に渡り芸術家として活躍。インドにて30年以上、芸術を通して子どものエンパワーメントを目指し児童労働問題に取り組んでいる。また、平和問題、ダリット問題（カースト問題）、女性問題などにも取り組む人権活動家。2000年NY国連本部にて開催された「子ども兵士会議」や2004年フィレンツェで開催された「児童労働世界会議」のアーティスティックダイレクターとしても活躍。

「Basha and the Lion Heart」（ショートフィルム）がラホール国際映画祭にて国際賞を授賞（2000年）。ケンペゴダ賞（カルナタカ州政府教育省）受賞（2009年）児童労働の現場に踏み込んだドキュメンタリーフィルム「歴史の旅（*History Expedition*）」（2006年作成）がサンフランシスコ国際ショートフィルムフェスティバルにて選ばれる。

2007年よりピースボートにてシンガポール～インド間の海路にて児童労働及びアートの役割について講演、パフォーマンス、ワークショップを行う。2008年にはアーティストとして生きる被爆者の方へのインタビュー及び撮影を行う。現在「平和の預言者（*Prophets of Peace*）」と題した証言ドキュメンタリーフィルムを制作中。また同年にはバンガロール～ラホール間を自転車で行く平和サイクルラリーをリードする。インドの子どもたちがパキスタンの子どもたちへ書いた平和メッセージの手紙7000通を集めた。

日本の憲法9条をインドに広めようとする活動も開始。広島・長崎の原爆をテーマにしたダンス劇「白い花（*White Flowers*）」を発表（2008年）。以来、インド6大都市にて50回以上公演。またバンガロール市、コーチン市、バロダ市に佐々木禎子さんの千羽鶴をイメージした平和モニュメントを制作し、各都市に寄贈した。ボーンフリーアートスクールの創設者。バンガロール出身。

i 詳しくは「ボーンフリーアートJapan」のパンフレットに記述。

ii <http://www.asahi.com/national/update/0613/SEB201306120060.html> 2013/09/12

iv 1987年、沖縄国体の際に掲揚された日の丸を焼き捨てた読谷村議会議員（2010年まで現職）。現在は浄土真宗大谷派僧侶。アジェンダ・プロジェクト編「沖縄からの風『日本復帰』40年を問い直す」星雲社、2012年、p114。

v <http://kichi-iranai.jp/>

vi 詳細は次の著書を参考。浦島悦子「名護の選択 海にも陸にも基地はいらない」インパクト出版会

vii ヘリ基地反対協議会：代表安次富浩氏／ホームページ；<http://www.mco.ne.jp/~herikiti/>

viii ヤンバル東村で2007年より座り込みを続けている市民グループ。<http://takae.ti-da.net/c89151.html>

ix 金武町は約37平方キロメートル。

x 「命（ぬち）どう宝の家」が平和資料館として伊江島にある。